MONTHLY ORCHESTRA 2

読売日本交響楽団　月刊オーケストラ　2022年2月号　目次

2月の演奏会 2

2/19 土曜マチネーシリーズ

2/20 日曜マチネーシリーズ

2月のマエストロ&アーティスト 3

2月の楽曲紹介 5

読響ニュース 9

日テレコーナー 読響プレミア放送予定 11

読響賛助会員 12

読響メンバー 16

読響プロフィール 20

感染予防対策へのご協力のお願い

- マスクの着用、咳エチケットの実践をお願いいたします。マスクを着用されない方の入場はお断りいたします。
- 会場内では極力会話をお控えくださいますようお願いいたします。「ブラボー」などの掛け声も禁止させていただきます。
- 終演後は出口付近の密集を緩和するため、時差退場へのご協力をお願いいたします。
- 感染者が発生した場合など、必要に応じて保健所等の公的機関へお客様の情報を提供させていただく可能性がございます。なお、チケットご購入者様と当日のご来場者様が異なる場合には、ロビーにて「来場者登録用紙」にご記入ください。
- 楽屋口等での出演者との面会・サインはお断りいたします。

演奏をお楽しみいただくために

写真撮影・録画・録音はお断りいたします。

携帯電話の電源、時計のアラームはお切りください。補聴器はしっかり装着してください。キーホルダーの鈴やアメの包み紙の音などにもご注意ください。

演奏中にプログラムをご覧になる際は、ページをめくる音にご配慮ください。

拍手はタクトが降ろされてから。消えゆく余韻は生演奏の醍醐味です。その貴重な時間を、ぜひご堪能ください。

2/19 Sat.

第244回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール　14時開演
SATURDAY MATINÉE SERIES No.244 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

2/20 Sun.

第244回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール　14時開演
SUNDAY MATINÉE SERIES No.244 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

指揮 Principal Conductor	**セバスティアン・ヴァイグレ**（常任指揮者）*–p.3* SEBASTIAN WEIGLE
チェロ Cello	**上野通明** *–p.4* MICHIAKI UENO
コンサートマスター Concertmaster	林 悠介 YUSUKE HAYASHI
ロルツィング LORTZING	**歌劇〈密猟者〉序曲**［約7分］*–p.5* "Der Wildschütz" Overture
ドヴォルザーク DVOŘÁK	**チェロ協奏曲** ロ短調 作品104［約40分］*–p.6* Cello Concerto in B minor, op.104 I. Allegro II. Adagio ma non troppo III. Finale: Allegro moderato
［休憩］ [Intermission]	
シューマン SCHUMANN	**交響曲 第3番** 変ホ長調 作品97 **〈ライン〉** ［約32分］*–p.7* Symphony No. 3 in E flat major, op. 97 "Rheinische" I. Lebhaft II. Scherzo: Sehr mäßig III. Nicht schnell IV. Feierlich V. Lebhaft

※当初の発表から出演者の一部が変更されました。

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）
独立行政法人日本芸術文化振興会
共催：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京芸術劇場

芸劇＆読響ジュニア・アンサンブル・アカデミー　プレコンサート
2月20日（日）の《第244回 日曜マチネーシリーズ》では、開演前の13時35分から、「芸劇＆読響ジュニア・アンサンブル・アカデミー」の受講生によるプレコンサートをコンサートホールで開催します。

指揮
セバスティアン・ヴァイグレ
（常任指揮者）
SEBASTIAN WEIGLE, Principal Conductor

6か月ぶりの来日が実現！シューマンに熱い思いを込める

© 読響

オペラとコンサートの双方で目覚ましい活躍をするドイツの名匠。4度目となる隔離措置を経て、日本での公演が遂に実現。ドヴォルザークの傑作協奏曲とシューマンの〈ライン〉を取り上げる。

1961年ベルリン生まれ。82年にベルリン国立歌劇場管の首席ホルン奏者となった後、巨匠バレンボイムの勧めで90年代後半から本格的に指揮をはじめた。2003年にフランクフルト歌劇場でR. シュトラウス〈影のない女〉を振り、ドイツのオペラ雑誌『オーパンヴェルト』の「年間最優秀指揮者」に選ばれた。04年から09年までリセウ大劇場の音楽総監督を務め、ベルク〈ヴォツェック〉やワーグナー〈タンホイザー〉など数々の名演奏を繰り広げ、評判を呼んだ。07年から11年までバイロイト音楽祭にて、ワーグナー〈ニュルンベルクのマイスタージンガー〉を指揮し、世界的注目を浴びた。08年からフランクフルト歌劇場の音楽総監督を務める。11年に同歌劇場管が『オーパンヴェルト』誌の「年間最優秀オーケストラ」に選ばれ、15年、18年、20年にも同歌劇場が「年間最優秀歌劇場」に輝くなど、その手腕は高く評価されている。これまでに、メトロポリタン歌劇場、ウィーン国立歌劇場、ベルリン国立歌劇場、ドレスデン国立歌劇場、バイエルン国立歌劇場などに客演を重ねるほか、ザルツブルク音楽祭にも出演。ベルリン放送響、ウィーン響、フランクフルト放送響などの一流楽団を指揮するなど、国際的に活躍している。読響には16年8月に初登場。オペラでは19年の東京二期会のR. シュトラウス〈サロメ〉（第28回三菱UFJ信託音楽賞受賞）、昨年2月のワーグナー〈タンホイザー〉などで共演し、いずれも好評を博した。

チェロ

上野通明

MICHIAKI UENO, Cello

2021年ジュネーヴ国際音楽コンクールで優勝し、傑出した才能として注目を浴びる新鋭。1995年パラグアイ生まれ。5歳からチェロを始め、幼少期をスペインで過ごす。13歳で若い音楽家のためのチャイコフスキー国際音楽コンクールで日本人として初めて優勝。ルーマニア国際音楽コンクール最年少優勝、ブラームス国際コンクール第1位、ルトスワフスキ国際チェロコンクール第2位など輝かしい受賞歴を誇る。ロシア国立響、ワルシャワ国立・フィル、ノルトライン・ヴェストファーレン州立ノイエ・フィル、読響、東京都響、東京響など国内外の楽団と共演するほか、カザルス音楽祭、ヴェルビエ音楽祭などにも参加。これまで馬場省一、I. エチェパレ、毛利伯郎に、現在はP. ウィスペルウェイ、G. ホフマンに師事。使用楽器は 1758年製 P.A. テストーレ（宗次コレクションより貸与）。読響とは19年4月以来、2度目の共演。

ロルツィング
歌劇〈密猟者〉序曲

アルベルト・ロルツィング（1801〜51）は喜劇オペラによって知られるドイツの作曲家。多くの作曲家が音楽一家に生まれているが、ロルツィングは俳優一家の出身だ。自身も役者や歌手として舞台に立つことで、劇場での実践的な経験を積んだ。両親の劇団に役者として出演する一方、早くから音楽を好み、ピアノや作曲、さらにヴァイオリン、チェロを学び、ときには劇場のオーケストラ・ピットに入ることもあった。ロルツィングは女優と結婚し、一家で役者として活動を続けながら、オペラの作曲に挑む。初期のオペラ〈ポーランド人とその子供〉で成功を収めた際、ロルツィングは作曲者としてではなく喜劇役者として批評家に絶賛されたという。1837年、代表作となる歌劇〈ロシア皇帝と船大工〉で作曲家としての名声を高め、以後、歌劇〈密猟者〉などの作品によりドイツ語圏で人気を獲得した。

歌劇〈密猟者〉は、アウグスト・フォン・コッツェブーの原作をもとにロルツィング自身が台本を執筆した喜劇。校長先生と村娘が婚約を祝っているところに、狩人がやってきて、校長が宴のごちそう用に仕留めた鹿は伯爵の狩り場のものだったと告げる。罰として校長は解雇を宣言されるが、伯爵が若い娘に甘いことから、校長は婚約者に対し、伯爵に赦免をお願いしてほしいと乞う。そこに伯爵の妹である男爵夫人があらわれ、村娘に変装して代わりに赦免を請け負ったことから、大騒動が巻き起こる。

序曲は雄大な総奏で開始され、やがて軽快な調子に転じて、狩りを連想させるホルンが朗らかな主題を奏でる。意気揚々とした楽想が繰り広げられ、後半には鹿を仕留める瞬間をあらわす銃声が一発鳴り響いて緊張感を高める。しかし、すぐに陽気さを取り戻して、浮き立つような気分のまま曲を閉じる。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1842年／初演：1842年12月31日、ライプツィヒ／演奏時間：約7分
楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部

ドヴォルザーク
チェロ協奏曲 ロ短調 作品104

チェコ国民楽派の大家アントニン・ドヴォルザーク（1841〜1904）が残したチェロ協奏曲の最高峰。すでに国際的名声を得ていたドヴォルザークは、1892年9月、ニューヨーク・ナショナル音楽院の創立者ジャネット・サーバー女史の要請を受けて渡米し、同音楽院の院長に就任した。そして現地音楽の要素と故郷ボヘミアの民俗色を融合させた、交響曲〈新世界から〉等の傑作を生み出した。しかし望郷の念が募る彼は、1894年11月から95年2月にかけて、同郷のチェロ奏者ヴィーハンから望まれていたこの協奏曲を作曲し、4月に帰国してしまう。本作は手直しを経て1895年6月に完成。翌年ロンドンにて初演された。

曲は、哀愁に充ちた雄大かつ情熱的な音楽。大規模な構成の中に、高まる郷愁を反映したボヘミア的な情感が横溢（おういつ）している。特徴的なのが協奏曲には稀なほどシンフォニックな管弦楽。複数の主題をクラリネットが提示し、弦楽器の協奏曲での使用は稀なトロンボーンとチューバが重心の低い響きを作り出すなど、管楽器の活躍も目覚ましい。独奏は存分に技巧的ながら、明確なカデンツァはなく、管弦楽との一体感や音楽の流れが重視されている。

なお第2楽章中間部の訴えるような主題は、初恋の女性ヨゼフィーナ（妻の姉）が好んだ歌曲〈ひとりにして〉に拠っており、1895年5月の彼女の死に際して、第3楽章終結部にも同旋律が加えられた。

第1楽章　アレグロ　共に哀切な冒頭の第1主題とホルンが出す第2主題を軸にした壮大な音楽。長大な管弦楽部分に続いて、朗々と歌い且（か）つ装飾的な独奏が縦横に展開される。

第2楽章　アダージョ・マ・ノン・トロッポ　ト長調の緩徐楽章。優しい主題が歌われる叙情的な主部に、激しさを湛（たた）えた中間部が挟まれる。

第3楽章　フィナーレ：アレグロ・モデラート　民俗色が特に濃い終曲。力強い主要主題に二つの副主題が挟まれ、後半のしっとりした部分では第1、2楽章の主題も回想される。

〈柴田克彦 音楽ライター〉

作曲：1894〜95年／初演：1896年3月19日、ロンドン／演奏時間：約40分
楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン3、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（トライアングル）、弦五部、独奏チェロ

シューマン
交響曲 第3番 変ホ長調 作品97〈ライン〉

1850年、ロベルト・シューマン（1810〜56）はドレスデンからデュッセルドルフへと転居して、音楽活動の転機を迎えた。ドレスデン時代にピアノ協奏曲イ短調や交響曲第2番ハ長調をはじめとする傑作を残したが、この地の音楽界では望みどおりの信望と友情を得られず、新たなポストを新天地に求めた。当初、ライプツィヒのゲヴァントハウス管弦楽団の指揮者などのポストを打診したものの実現には至らず、紆余（うよ）曲折を経て、フェルディナント・ヒラーの後任としてデュッセルドルフ市音楽監督の職務を引き受けることになった。

ライン河畔のデュッセルドルフに到着したシューマン夫妻を、市民は温かく迎えた。音楽監督の職務にはシーズンに10回、オーケストラの定期演奏会を指揮することが含まれており、シューマンは自分のオーケストラを持つことになる。

赴任して間もなく、シューマンは交響曲第3番の作曲に着手した。デュッセルドルフのオーケストラのコンサートマスターを務めていたヴァジエレフスキによれば、シューマンがライン川上流にあるケルンの大聖堂を訪れた際に霊感を受けたことが、この交響曲の作曲の契機となったという。作品はシューマン自身の指揮によって初演された。なお、〈ライン〉の呼称は作曲者没後に付けられたものである。

第1楽章　生き生きと　各楽章の速度標語はドイツ語で記されている。雄大な冒頭主題によって勢いよく開始される。4分の3拍子で書かれているが、この冒頭主題がヘミオラ風になっている（3拍単位のところを2拍単位で分割する）ことがリズムに変化を与え、大河の奔流（ほんりゅう）を連想させる。

第2楽章　スケルツォ、きわめて中庸に　晴朗で素朴な舞曲風楽章。

第3楽章　速くなく　弦楽器と木管楽器がささやくように対話する。

第4楽章　荘厳に　ケルン大聖堂で目にした枢機卿（すうききょう）昇任式の印象が反映されているといわれる。

第5楽章　生き生きと　祝祭的で高揚感にあふれたフィナーレ。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1850年／初演：1851年2月6日、デュッセルドルフ／演奏時間：約32分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部